あたらしい生活シアター

作　菅原直樹

登場人物

本山　認知症の女
堀田　車椅子の男

夏木　老人ホームの生活相談員（女）
小池　老人ホームの入居者（男）
横井　生活シアターのメンバー（女）
坂田　生活シアターのメンバー（女）
岡　生活シアターのメンバー（男）
山寺　生活シアターのメンバー（女）

景子　母
明美　娘
田所　一人旅をしている男
店員
通行人

本田　老人ホームの介護職員（女）
香川　老人ホームの介護職員（女）
金沢　老人ホームの介護職員（女）
落合　老人ホームの入居者（男）
青木　生活シアターのメンバー（女）

1　女と男

車椅子に乗った本山が登場。

本山「すみませーん、誰かいませんか。すみませーん」

間。
すると、本山が登場した反対側から、堀田がやってくる。

堀田「こんにちは」
本山「…こんにちは」

間。

本山「…以前、どこかでお会いしたことが、」
堀田「はい、そうですね」
本山「えーと、失礼ですが、お名前を聞いてもよろしいですか？」
堀田「堀田勝です」
本山「…堀田勝さん。そうですか」
堀田「なんか、聞き覚えがあるでしょう？」
本山「思い出せないんですが、はい、そうですね、なんか、聞き覚えが…。あの、私、ここがどこだからわからなくて」
堀田「ここは、懐かしい場所」
本山「懐かしい場所です」
堀田「そうです。思い出せないかもしれませんが、なんか、見覚えがありませんか？」
本山「…はぁ」
堀田「そしたら、あっちへ行ってみましょう」
本山「あっちですか？」
堀田「はい」

堀田、本山の車椅子を押す。
二人は舞台の前面へ。

本山「あー」
堀田「なんか、見られているような感じがしませんか」
本山「はい、たくさんの視線を感じます。ここはどこでしょうか？」
堀田「どこでもありません」
本山「え」
堀田「舞台ですから」
本山「舞台」
堀田「そうです。かつて、ここで、いろんな人たちが役を演

じて、いろんな作品が上演されました」
本山「そうだったんですか」
堀田「あなたも演じていたんですよ」
本山「え、私が。…信じられません。何の役を演じたんですか？」
堀田「普通の町に生まれて、普通の家庭で育って、普通の会社で勤めて、普通の家庭を築いて、普通に年老いていく、普通の女性の役です」
本山「…その役なら私でもできそう」
堀田「私は、その女性に恋をする、普通の男性の役です」
本山「…そうだったんですか。すみません、私、大切なことを忘れてしまって」
堀田「いいんです。記憶なんて元々不確かなものなんですから。それより、今を感じましょう」
本山「今ですか」
堀田「はい。私とあなたが今ここにいる、それは確かなことです。でしょう？」
本山「…そうですね」
堀田「こうやって、どこでもない場所で、何者でもないものとして、あなたと今、一緒にいられる。とても幸せなことだと思っています」
本山「…はい。一緒にいてくれるんですか？」
堀田「はい」

堀田、本山の手を握る。
堀田「ずっと、一緒にいますよ」
二人は、前方に見える舞台を眺めている。
音楽が流れる。
暗転。
スクリーンにタイトルが浮かび上がる。
「あたらしい生活シアター」

2　あたらしい生活シアター

ここはかつて演劇サークルのアトリエだった場所。
夏木と車椅子の小池がやってくる。夏木が車椅子の小池を押している。

夏木「勝手に中に入って大丈夫ですか？」
小池「大丈夫、大丈夫」

夏木「でも、少しだけですよ。10時までに受付を済まさないといけないですから」
小池「わかってる、わかってる」

空間を見回す二人。

夏木「広いですね」
小池「…懐かしいな」
夏木「今は誰も使ってないんですか？」
小池「たぶん」
夏木「ここでお稽古したり、発表会をしたりしてたんですか？」
小池「そう」
夏木「こんな山の中で本当に芝居作ってたんですね」
小池「楽しかったなぁ」
夏木「秘密基地みたいですね」
小池「そう、まるで青春だった。年老いた連中の集まりだったけど」
夏木「小池さんが演技している姿、想像できないです。貫一お宮みたいなことしてたんですか？」
小池「いやいや、そういうんじゃない」
夏木「え、じゃあ、どういう役をされていたんですか？」
小池「…車椅子に乗った頑固なじいさんの役」
夏木「え、それ、今じゃないですか」
小池「そう、そういうこと」
夏木「え、どういうことですか？」
小池「年老いた連中が、これまでの人生を振り返ったり、これから先のことを想像したりして、芝居を作ってたんだよ」
夏木「へえ」
小池「だから演劇してるっていう感じじゃなかったな」
夏木「じゃあ、貫一がお宮を蹴り飛ばすとか、そういう派手な演技はなかったんですね」
小池「まぁ、それもやってみたかったけどな」

そこに、横井と岡と坂田が入ってくる。岡はダンボール箱を持っている。

横井「あら」
夏木「あ、すみません、お邪魔してます」
坂田「え、小池さん！」
小池「お、おう」
横井「うわー、小池さん、ご無沙汰してます」
岡「なんだ、小池さんかぁ」
坂田「久しぶり！　元気してる？」
小池「元気じゃないけども、まぁ、なんとか生きてるよ」
夏木「あ、あの、私、花田町の老人ホームで生活相談員をし

ている夏木と申します。すみません、勝手に入ってしまって、誰もいらっしゃらないと思って」
坂田「いやいや、いいのよ」
横井「小池さんを連れてきてくださったんですね」
夏木「あ、はい。この後、山本病院で受診があるんですけど、思いのほか早く到着してしまって。そしたら、小池さんがこちらに、」
小池「何百万回言い続けて、やっと、連れてきてくれたよ」
夏木「すみませんね。なかなか、忙しくて、」
横井「じゃあ、今日はあんまり時間がないんですね」
夏木「すみません、10時に予約してるので。あの、また時間があるときに、お連れできたらと思っているんですが」
小池「でも、あんたら、どうしたの？　随分前からほったらかしになってたと思ってたけど、」
坂田「それが、（岡、横井に）ねえ」
岡「小池さん、最高のタイミングに来たね」
横井「生活シアター、また再開しようと思っているんです」
小池「へえ」
坂田「さっきも掃除しながら、小池さんや景子さんの話してたんですよ。最近どうしてるんだろうって」
小池「そっか。でも、さすがにみんな歳をとりすぎだろ。私もこんな状態だし」
坂田「まぁ、とりあえず集まれるメンバーだけで」
岡「小池さんもどうだい？」
小池「そりゃあ気持ちは参加したいけど、病気と、あと、（夏木を見て）この人たち次第だな」
夏木「あぁ、…そんなに頻繁に外出は難しいかもしれませんけど、月に一回外出レクリエーションも行なっているので、」
横井「職員さんも忙しいですからね」
夏木「すみません」
横井「いえいえ。私たちが迎えにいけたらいいんですけど、」
岡「そうだなぁ」
夏木「えーと、生活シアター？」
横井「そうです」
夏木「何名くらいで活動されているんですか？」
坂田「今は5人。元々は20数人いたんだけど、みんな、どんどん年取って、身体を壊したり、認知症になったりして、活動が続けられなくなっちゃってね」
夏木「あぁ」
小池「もう15年くらいになるか」
岡「そう、活動休止して15年」
夏木「あぁ」
坂田「まぁ、活動再開って言っても、ここの片付けとお茶するくらいなんですけど」
横井「あ、そうだ、小池さん、今日、山寺さんも来ますよ」
小池「おお、そうか。…もうしばらく会ってないな」

坂田「(夏木に) 昔、小池さんの相手役をしてた人」
夏木「あぁ」
岡「あ、これこれ」

と、岡、段ボール箱から何かを探す。一冊の台本をとり、小池に差し出す。

岡「小池さんの台本」
小池「あぁ」
夏木「え、小池さんの？」
横井「生活シアターは、普通の演劇サークルとはちょっと違うんですよ」
夏木「あぁ、さっき少し小池さんから」

横井「あぁ、そう」
夏木「貫一お宮はしないんですよね？」
横井「はは。そうですね。メンバーのそれぞれが生きてきた人生とか、こうありたいという未来とか、そういうのをそのまま台本にするんです。これは小池さんの台本、これは岡さんの台本」

と、岡が持っている台本を指す。

横井「みんな一冊、自分の台本があるんです」
夏木「なんか自分史みたな感じですか？」
横井「そうです」
夏木「えー、小池さんの台本、読んでみたい」
小池「だめ」
夏木「えー、なんで？」
小池「恥ずかしい」
坂田「でも、小池さんを知る上ではうってつけかもね」
夏木「そうですよねぇ」

小池は台本をめくっている。

小池「懐かしいな。探してたんだよ」
岡「ここにみんなの分がどっさりあるよ」
夏木「いやあ、今日は皆さんにお会いできて、感激です。小池さん、いつも施設で、ここでの思い出を楽しそうにお話されるんですよ。ただ、山の中にそんなアトリエがあるのかって、ちょっと半信半疑だったんです」
坂田「あぁ。老人の戯言じゃないかって」
小池「失礼なやつだな」
夏木「ごめんなさいね。だから、今日ここに来れて、皆さんとお会いできて、なんていうか、小池さんの思い出にお邪魔させてもらってるみたいで」

坂田「そうですよね」
夏木「あの、また小池さんと一緒に来させていただいてもよろしいですか？」
坂田「ぜひぜひ」
横井「よかったら施設の、他の入居者さんも連れてきてください」
夏木「え、いいんですか？」
岡「大歓迎です。ここは車椅子で入れるからな」
坂田「裏に、町が一望できるテラスがあるんですよ」
夏木「ええ、テラス！！」
横井「ちょっと、ご覧になりますか？」
夏木「え、いいですか？」
坂田「私たちも稽古とか本番が終わると、そこでお茶飲んだりお酒飲んだりしてね」
横井「そうそう、気持ちいいですよ」
夏木「じゃあ、ちょっと、」
横井「どうぞ、案内します」
坂田「小池さんは？」
小池「俺はいいよ。ここにいる」
岡「俺も残るよ」
横井「あぁ、そう。（夏木に）じゃあ、どうぞ」
夏木「あ、はい。（小池に）ちょっと、行ってきます」
小池「はい」

横井、夏木、坂田は奥に去っていく。
小池は台本を読んでいる。
小池、しばらくして顔を上げて、

小池「奥さんはどうしてる？」
岡「老人ホーム」
小池「あぁ、そうか」
岡「脳梗塞を患って、言葉も喋れなくなってな。今はもうほとんど寝たきりだよ」
小池「そうか」
岡「あの人に相当無理を言って連れてきてもらったんだろう？」
小池「そりゃあそうだ。駄々をこねたよ」
岡「問題老人だな」
小池「老人ホームじゃ、玄関から向こうに出るのに、一苦労だよ」
岡「そうだな」
小池「玄関から向こうに出れるのは、寝ている時の夢くらいだ。ここで芝居していた頃の夢をよく見るよ」
岡「そうか」
小池「今にして思うよ、演劇したいって」
岡「へえ」

小池「だって、誰にも会えないし、どこにも行けないし、何者にもなれない」
岡「確かに、ここでは、誰にでも会えて、どこにでも行けて、何者にもなれた」
小池「そうそう」
岡「まぁ、でも、虚構の世界での話だけどな」
小池「いや、虚構でも現実でも一緒だよ。この歳になると」
岡「そうだな」

小池、台本を見る。

小池「さすがにもうこうなったら、演劇も無理かな。最近、めまいがひどくなってきて、心臓も悪くなってきて、もってあと一年くらいだろう」
岡「先のことは誰にもわからないよ」

岡、段ボール箱を持って去る。
小池、台本を読む。

小池「…（台本に書かれているセリフを読む）4月6日。妻との記念日はたくさんある。結婚記念日、娘と息子の誕生日、津市に家を建てた日、銀婚式」

そこに、入り口の方から山寺がやってくる。
小池を見て、立ち止まる。
小池は気付かずにセリフを喋り続けている。

小池「よく妻から、今日は何の日？　と突然聞かれて、その度にうねり声を上げながら、記憶を蘇らせていた。おかげで、妻がいなくなった今、その日が来ると自然と何の日だかわかる」

山寺、小池の台本を演じて、

山寺「今日は何の日？」
小池「え？」

小池、びっくりして顔を上げる。

山寺「わからない？　4月6日」
小池「…わからないな」

小池を演じ続ける。

山寺「ヒント、桜が満開」
小池「…えー」

山寺「じゃあ、制限時間は今日が終わるまで」
小池「ええ、参ったな」

間。

小池「あぁ！　思い出した」
山寺「思い出した？」
小池「僕たちの一番大切な日じゃないか」
山寺「そう」
小池「そうか、今日だったか。あれから何年経った？」
山寺「あれから５０年」
小池「そうか、５０年か。僕が隣の席の弥生さんに赤鉛筆を借りたんだ」
山寺「そう、正解」
小池「よかった、よかった。そうだ、そしたら、出かけよう」
山寺「え、…どこへ？」
小池「桜がいっぱいあるところ」
山寺「え、でも、家の仕事がまだ残ってるのよ」
小池「いいじゃないか。子供たちも大きくなって、定年退職して、やっと二人で遊びに行けるようになったんだから」
山寺「まあね」
小池「もう、今まで生きてきた以上には生きられない。楽しめるときに楽しもうよ」
山寺「そしたらおにぎりでも作るわ」

小池、台本を読む。

小池「4月6日は、2つの記念日だ。私と妻が初めて高校の教室で出会った日。そして、その５０年後、二人の新しい人生を祝って、桜を見に行った日。
人気のない公園で二人でおにぎりを食べた。その一週間後、妻は医者から大腸がんの告知を受けた。まさかこの桜が、二人が元気な姿で見る最後の桜になるとは思ってもいなかった」

山寺、小池に近づいて、

山寺「どうしたの？」
小池「…え、あぁ」
山寺「おにぎり食べ過ぎた？」
小池「うん、ちょっと食べ過ぎた。（桜を見て）それにしても、きれいだな」
山寺「ね、満開」
小池「これからこんなゆっくりとした時間がずっと続くと思うと幸せだな」
山寺「そうね」

小池「弥生さんにはこれまで色々と迷惑をかけたよ」
山寺「あら、本当にそう思ってるの？」
小池「本当にそう思ってるよ。これからは弥生さんのために生きる」
山寺「また心にもないこと言って」
小池「いや、本当だよ。これから毎年ここで一緒に桜を見よう」
山寺「ええ、それは、いいわね」

山寺、フォークダンスのポーズをする。

山寺「覚えてる？」
小池「あぁ、覚えてるよ。高校3年生の体育祭、オクラホマミクサー」
山寺「ドキドキした」
小池「あぁ、ドキドキしたな」

遠くからオクラホマミキサーの音が聞こえてくる。
小池、車椅子から立ち上がって、山寺の前へ。

山寺「あれから、ずっと、踊ってるのね、私たち」
小池「そうだね。喧嘩したり、仲直りしたりしながら、ずっと踊ってるんだね」

二人は踊り始める。
二人の掛け合いの間に、横井、夏木、坂田が入ってくる。
夏木は小池が踊っていること、そして、立ち上がっていることに驚きを隠せない。

フォークダンスが終わる。
見ている夏木、横井、坂田、岡は拍手。

夏木「すごい、小池さん、男の顔になってた！」
小池「前から男だよ」
坂田「でも20歳は若返ったんじゃない」
横井「ねえ」
山寺「（小池に）お久しぶりです」
小池「あぁ」
山寺「元気そうでよかったです」
小池「いや、実はそうではないんだよ」

と、ふらつく。

夏木「お、おっと。気をつけてくださいね」

と、すかさず介助する。

小池「ありがとう」
夏木「小池さん、座りますよ」
小池「はい」

小池、車椅子に座る。

夏木「いや、でも、小池さん、踊られている時、立位が安定されてて驚きました。（周りの人に）もう2年間車椅子なんですよ」
坂田「あぁ、そうだったの」
山寺「演技は年齢を感じさせませんでしたよ」
小池「そっちもな」
横井「魂は衰えないですからね」
小池「足が悪いのを忘れてた」
夏木「小池さんにはどんなリハビリよりも、役を演じるのがいいのかもしれませんね」
坂田「生活リハビリシアターだよ。サークルの名前変えちゃおうっか？」
岡「それいいね」
夏木「あの、久しぶりに再会されたところ、申し訳ないのですが、」
坂田「あ、病院の時間」
夏木「はい、そろそろ、」
横井「あ、そうそう、あのチラシ持ってきてる？」
坂田「あぁ」

と、カバンからチラシを取り出す。チラシは黄色の紙にプリントされている。

横井「来月、ここでリーディング公演をやろうと思ってるんです」
夏木「リーディング公演？」
横井「はい、ここにどっさりとある台本を、今いるメンバーで朗読しようと思ってて」
夏木「あぁ」
坂田「来月の第三木曜です」

と、夏木にチラシを渡す。

夏木「あぁ、木曜日の午後だったら、もしかしたら、」
坂田「ぜひぜひ」
夏木「また施設に帰って、外出レクリエーションの企画として提案させていただきます」
横井「よろしくお願いします」

夏木「じゃあ、小池さん、行きましょうか」
小池「それじゃあ、みなさん、久しぶりに会えてよかったよ」
横井「私たちも小池さんの演技を見れてよかったです」
小池「（山寺に）じゃあ」

と、手を振る。
山寺、近づいて小池の手を握る。

山寺「また演じましょう」
小池「あぁ、あなたに会えて元気が出たよ。これが本当の薬だな」
夏木「じゃあ、失礼します」
横井「はーい、また」
岡「またな」

夏木、小池の車椅子を押して、去る。

坂田「よかったね、会えて」
山寺「うん」

山寺、泣いている。

山寺「ごめんなさい」

横井「舞台って不思議だよね。現実じゃありえないことがどんどん起きるんだから」
坂田「また来てくれるよ」
山寺「そうですね」
岡「さっき、小池さんが言ってたよ。今になって演劇をしたいって」
坂田「へえ」
岡「いや、俺も確かにそうだなって思ったよ。みんな高齢になって活動を続けるのは難しいって思ってたけど、でも、違うんだよ。俺らは高齢になったとき、老いてボケて死にゆくときのために、演劇をやっていたんだよ」
横井「老いてボケて死にゆく時のために」
岡「そう」
坂田「景子さん、今、名古屋なんだって」
山寺「娘さんのところですよね」
坂田「そうそう。認知症になって一人暮らしが難しくなって、娘さんと一緒に住むようになったの。でも、知り合いもいないし、地理もわからないから、ずっと家に閉じこもってるみたい」
岡「あぁ」
山寺「景子さんらしくないですね」
坂田「そうそう。たぶん、すごい演劇したいと思ってるだろうなって」

山寺「そうですね」
横井「なんか、そう考えると、生活シアター、再開するべくして再開した、って感じ」
坂田「まさに。たまたまお茶してて盛り上がったのがきっかけだったけど」
山寺「でも、一番、求めている人たちって、ここに来ることが難しい人たちですよね」
坂田「あー」
横井「確かに」
坂田「小池さんみたいに職員さんがついてきてくれるといいけど」
岡「俺たちから行ってみるっていうのはどう？」
山寺「あぁ」
坂田「え、出張演劇？」
岡「そうそう」
坂田「あー」
横井「それいいですね。景子さんとか、落合さんとか、もうこっちから会いに行って、勝手にお芝居を始めてしまう、っていう」
坂田「落合さん、驚かしちゃう？」
山寺「いいですね」
横井「そしたら、何人か集めて、計画を練りましょう」
山寺「はい」
坂田「面白くなってきたね」
山寺「あたらしい生活シアターの始まりですね」
岡「いいねえ！」

音楽が流れる。
暗転。

3　わたしの家

1

明美の家の居間。
ソファーだけ置いてある。
景子がソファーで雑誌を読んでいる。
明美が慌ただしく居間を横切る。出勤前の準備をしているようだ。

景子「明美、コーヒーの飲む時間ある？」
明美「え、もう出ないといけない時間なんだけど」
景子「堤さんが送ってきてくれたコーヒー。コクがあってすごい美味しいのよ」
明美「あ、そう。そしたらちょと飲んでから行こうかな。あ、お母さん、私、今日遅くなるから」
景子「わかりました」
明美「冷凍庫に、こないだ買いだめした冷凍食品があるから」
景子「はいはい」
明美「…なんか臭くない？」
景子「え、そう？」
明美「お湯沸かしてる？」
景子「うん。もうそろそろかしら、」
明美、急いで台所へ。
景子「え…」
景子、雑誌を傍らに置いて、立ち上がる。
台所の方から、
明美の声「ぎゃーー！」
景子「え、明美、どうしたの？」
間。
景子「明美？　明美？」
間。
景子「大丈夫？」
間。
景子「…どうしたのかしら、」

と、景子、読んでいた雑誌を丸めて、武器のような感じにして、台所の方へ。

景子「明美ー！」

すると、台所の方から、明美がやってくる。手には電気ケトル。下部が丸焦げになっている。

景子「どうしたの？」
明美「どうしたのじゃないよ、これ」
景子「あら、真っ黒」
明美「お母さん、これ、なんだかわかる？」
景子「やかんでしょ」
明美「…電気ケトル」
景子「え、電気、」
明美「これね、やかんじゃないの。電気で沸かすやつ、電気ポットみたいなもんなの」
景子「ええ、だって、それは、」
明美「大惨事になるところだったよ」
景子「火にかけちゃダメなの」
明美「見ればわかるでしょ」
景子「やかんじゃないの」
明美「素材は全然やかんじゃないでしょ」
景子「だって、やかんが古くなったから、あなた、新しいやかんを買ってきたんでしょう」
明美「いや、だから、やかんの代わりに、電気ケトルを買ってきたの。お母さん、一人の時間が長いから、火を使わないでお湯が沸かせるようにって思って」
景子「なら、ちゃんとそれを言いなさいよ」
明美「いや、言ったでしょ！」
景子「言ってません！」
明美「もう、私がいたからよかったけど、私がいなかったらって思うと、ゾッとするよ」
景子「こんなやかんの形をしたものがやかんじゃないっていうの。これ、絶対に他の人も間違えるわよ。ちょっと、メーカーに問い合わせようかしら」

間。

明美「ねえ、お母さん、今後一切、ガスコンロに近づかないで」
景子「ええ、そしたらお湯はどうやって沸かすのよ」
明美「また電気ポット買ってくるか、コンロを〒に変えるかするから、それまでは一切、ガスコンロに近づかないで。約束して」

景子「なんでよ。これが燃えちゃったのも、あなたがちゃんと説明しなかったのがいけないんでしょ。最初からあなたがやかんを買ってきてたら、こんなことにはならなかったんだから」
明美「違う」
景子「違うことないでしょう。ガスコンロ触れなかったら、お湯も沸かせないし、ご飯も作れないでしょう」
明美「だから作らないでいいの。わたしが全部作るから、お母さんは何もしないで」
景子「…私はそこまでぼけていません。あなたは仕事で忙しいんだから、自分でやれることは自分でやりますから」
明美「だから、仕事で忙しい娘のために何もしないでって言ってるの。何もしないで、じっとしてて。ね、それが一番、娘のためになってるの。わかった？」
景子「…」
明美「お母さんは、当たり前のことができなくなっている」
景子「そんなことありません」
明美「いや、聞いて。お母さんは、自分の知らないうちに、当たり前のことができなくなっているの。だから、自分の知らないうちに、周りの人に迷惑をかけてしまってるの」
景子「…じゃあ、生きているのが迷惑っていうことじゃない」
明美「そこまで言ってないよ」
景子「言ってるでしょ！　そういうことでしょ」
明美「だから、じっとしてて、って言ってるの。ご飯を作るのも、掃除をするのも、全部私がするから。だから、お母さんはじっとしてて」
景子「じゃあ、何をすればいいのよ」
明美「テレビを見たり、雑誌を読んだり、空を眺めたり」
景子「…」
明美「ね、約束して」
景子「約束？」
明美「約束しないと、私、安心して仕事に行けない。今日、私、仕事を休む」

間。

景子「…わかりました。私は何もしません」
明美「約束ね」

と、明美、ゆびきりの小指を出す。

景子「私は子供じゃないのよ。そんなのしないでも、約束くらい守わよ」
明美「…。じゃあ、行ってきます」

明美、バッグを持って玄関の方へ去る。

景子「…あー、もう頭にくる。はー。…コーヒー飲もう」

と、台所に向かおうとするが、焦げた電気ケトルを見て、

景子「コーヒー飲めないじゃないの。…やかんぐらい私が買うわよ」

と、玄関の方へ。

2

どこかのお店。
店員が暇そうに立っている。
そこに探し物をしている感じの景子がやってくる。

景子「あの、すみません」
店員「はい」
景子「あの、やかんはありますか？」
店員「やかんですか。いや、うちには置いてませんね」
景子「やかんも置いていないんですか？」
店員「はい、うちは文房具屋なんで」
景子「文房具屋？」
店員「はい」
景子「…そしたら、あの、やかんが売ってるお店を知りませんか？」
店員「あー。あの、店を出て、左に行くと、団子屋があるんですけど、そこを右に曲がって、少しすると金物屋があります」
景子「あぁ、金物屋。えーと、団子屋を」
店員「そこを右ですね」
景子「ありがとうございます」
店員「え、大丈夫ですか？」

景子、店を出る。

3

景子、商店街を歩いている。

景子「団子、団子、団子、団子…」

と、立ち止まる。

景子「あら、大きな水溜り。…どっこいしょ！」

と、水溜りを飛び越える。

景子「ふう」

と、再び歩きだす。

景子「…どっこいしょ、どっこいしょ、どっこいしょ、どっこいしょ、どっこいしょ、どっこいしょ」

前から通行人がやってくる。

景子「あの、すみません、どっこいしょ屋さんはここら辺にありますか？」

通行人「え、すみません、今なんて」

景子「どっこいしょ屋さん」

通行人「…どっこいしょ屋さん？」

景子「はい」

通行人「お店ですか？」

景子「はい」

通行人「どういうお店ですか？」

景子「いや、どっこいしょを食べるお店です」

通行人「すみません、ちょっと、いろいろ、わからないです」

景子「あら、今時の若い人はどっこいしょ屋さんも知らないの。ありがとうございました」

通行人、首をひねりながら去っていく。

景子、再び歩きだす。

4

景子、歩き疲れている。立ち止まる。

バッグから携帯電話を取り出し、携帯電話を見つめる。

景子を遠くから見ている田所。

景子「…明美、怒るわよね」

田所、近づいてくる。

田所「どうかしました？」

景子「え、あ、あぁ…」

田所「いや、さっきから行ったり来たりされてるから、なんか困ったことがあったのかなって」

景子「あの、ちょっと、道がわからなくなって」

田所「あぁ」

景子「あら、あなた、」
田所「はい？」
景子「どこかでお会いしたことがありますね」
田所「いや、初めてだと思いますけど、」
景子「ごめんなさい。ここら辺の方？」
田所「いや、違うんですけど」
景子「あ、そう」
田所「え、どちらに行かれようとしているんですか？」
景子「…家に帰りたいんです」
田所「あぁ。えーと、住所は？」
景子「えーと…、あら、ど忘れしちゃった」
田所「あぁ」
景子「私、最近、娘の家に引っ越してきたんですよ。だから、まだ住所が覚えられてなくて」
田所「あぁ。じゃあ、なんか目印の建物とかは」
景子「あぁ…。住宅街だから、みんな同じような家が建ってるんですよ」
田所「あぁ、そうですか。ちなみに、どちらから移ってこられたんですか」
景子「え、あぁ、三重県いなべ市です」
田所「え。あ、さくらポークの？」
景子「あら、よくご存知ですね」
田所「いや、昨日、行きましたよ」
景子「え、ええ、何で。何しに？」
田所「いや、ぼく、今、車で一人旅をしているんですよ。あてもなく全国各地回ってまして」
景子「あら、奇遇ですね」
田所「いや、ホントそうですね。びっくりしました」
景子「どこ行かれたの？」
田所「え、あぁ、いなべですか。あの、アタントとかこんま亭とか」
景子「あぁ、あそこはこんま亭はいなべのシュー太郎が有名ですよね」
田所「あ、そうなんすか」
景子「あら、食べてないの？　惜しいことしたのね」
田所「山歩いて、温泉入ったくらいで。あげき温泉に行きましたよ」
景子「え、私の家の近くよ！」
田所「え、そうなんですか？」
景子「温泉の駐車場から山の方を見ると、家が三軒見えるんですよ。その真ん中の家」
田所「えー、そうなんですか。もしかしたら、見てるかもしれないですね」
景子「大きな蔵がある家」
田所「あー。見たかな。うーん、ちょっと、思い出せないな」
景子「そこで４０年暮らしたのよ」

田所「へえ。あの辺、紅葉が綺麗でした」
景子「そうなのよ。あそこらへんはシーズンになると結構外からも人が来てね」
田所「あぁ」
景子「はあ。もうあの紅葉も見れないのよね。年内に家を取り壊すことになってるから」
田所「あぁ」
景子「不思議なご縁ね」
田所「ホントそうですね。いなべ、行きますか？」
景子「え」
田所「今から」
景子「今？」
田所「はい、車で一時間くらいですから」
景子「でも、あなた忙しいでしょ」
田所「いや、忙しいわけないでしょう。あてもなく旅してるんだから」
景子「あぁ、そうね」
田所「予定ありません。むしろ予定ください」
景子「え、本当に言ってるの？」
田所「あの、お名前は？」
景子「河原景子です」
田所「僕、田所です」
景子「田所さん」
田所「あの、景子さんがよければ、僕は全然いいですよ」
景子「じゃあ、そしたら、」
田所「ちなみに住所わかりますか？」
景子「もちろん。いなべ市〇〇町△△２４です。じゃあ、お願いします」
田所「あ、ご家族は心配しませんか？」
景子「大丈夫。今日は仕事で帰りが遅くなるって言ってたから」
田所「じゃあ、本当に行っちゃいましょうか？」
景子「はい、お願いします。なんか、ワクワクしてきた。こんな気分、久しぶりです」
田所「僕も楽しいです。ずっと一人だったから」

5

いなべ市の景子の家。
家を見上げている景子。
少し離れたところにいる田所。

景子「…」
田所「どうですか？」
景子「帰ってきた」
田所「僕は、昨日はあっちにいて、こっちを見上げてました。

またいなべに戻ってくるとはな」
景子「中に入ってください」
田所「え、入れるんですか」
景子「鍵はね、ここに隠してます」
田所「え、あぁ」

景子、玄関マットの下から鍵を取り出し、玄関の戸を開ける。

景子「お茶は出せませんけど」

景子と田所、中に入る。

景子「ただいま」

間。

景子「帰ってきたよ」

間。

景子「あらら。やっぱり家は住んでいないと、老朽化が進んでしまうのね。別の家みたい」

田所「思ってたのと違いますか」
景子「不思議な気分。この家のこと、今でも夢に見るのよ。だから帰ってきたー、って感じなんだけど、でも、ちゃぶ台もないし、タンスもないし、何にもない」
田所「あぁ」
景子「やっぱり、寂しいわね」
田所「そうですか」
景子「私が帰りたかった家は、もうどこにもないのね」

間。

景子「帰りたかったのは、ただいま、って言って、おかえり、って言ってくれる、あの頃の家なのよ」

田所、床に落ちている台本を手に取る。

田所「これなんですか？」
景子「あら、懐かしい。演劇の台本」
田所「演劇やってたんですか」
景子「昔、サークル仲間で上演したの。ここに私の人生が詰まっているの」

景子、台本を読む。

景子「二人目の子供が生まれた直後、夫が蒸発した。起業して失敗して、借金まみれになって。それからなんとか子供たちを食べさせなきゃと思って、看護婦の資格を取って、女手一つで子供を育てきた。あの頃は本当にお金も時間もなくて、子供たちに大変な思いをさせたけど、でも、今思い出すのは全部あの頃のこと」

周りから子供達の声が聞こえてくる。

明美の声「ただいま」
景子の声「明美、ちょっと、今日夜勤になったの」
明美の声「えー」
景子の声「大急ぎでご飯作るから、あとはよろしくね」
明美の声「ちょっと、待ってよ、私、これから出かけるよ」
景子の声「え、なにしに？」
明美の声「ちょっと、…友達と約束してて」
景子の声「また今度にしなさい」
明美の声「え、やだよ、やっと予定が合ったんだか」
景子の声「だってしょうがないでしょ。高倉さんが体調崩しちゃったんだから。ほら、ちゃぶ台拭いて」
明美の声「なんで、お母さん、いつも自分の都合ばっかり押し付けてくるの」
景子の声「え、自分の都合？　これは家族の都合でしょ。あなた、最近、家のこと全くしてないじゃないの。少しは手伝おうっていう気にならないの？」
明美の声「してるよ」
景子の声「全然してません。誰と会う約束してるの？」
明美の声「別にいいじゃん」
景子の声「誰？」
明美の声「秘密」
景子の声「なんで秘密にするのよ。誰なの、教えなさい」
明美の声「いいじゃない。秘密の一つか二つくらいあったって。私はお母さんのものじゃないんだよ」
恵の声「お母さん、火がつけっぱなしだよ」
景子の声「あー、もう。恵一人にはできないんだから、とにかく今日は家にいてね」
明美の声「…」
景子の声「え、明美、どこ行くの？　明美！　明美！」

玄関の方から田所がやってくる。
田所、蒸発した夫を演じる。

田所「…ただいま」
景子「…」
田所「…元気だった？」
景子「…なんで今頃になって」

田所「…景子に合わせる顔がないって、わかってる。でも、自然といなべに足が向いて…。外から家を見るだけのつもりだったんだけど、どうしても、顔が見たくて、」
恵子「ここは、あなたが帰る家ではありません」
田所「…すまない」

田所、背中を向け、去ろうとする。

恵子「10年前の私だったら、そう言って追い返したでしょうね」

田所、立ち止まる。

恵子「この家は、私にとっても、もう帰る家じゃないのよ」

田所、振り返る。

恵子「年をとると、どんどんいろいろなものが消えていくのね。私の大切な人も、物も、思いも。あなたを許せない気持ちもどっか行っちゃったわよ」
田所「…」
恵子「なんか、私じゃないみたい」
田所「いや、景子だ。本物の景子だよ」
景子「そう?」
田所「ずっと会いたかった、ずっと謝りたかった。…本当にすまなかった、許してくれ」
景子「別に謝らないでいいわよ」
田所「…」
景子「私を悲しませようとして戻ってきたわけじゃないでしょ?」
田所「もちろん」
景子「そしたら、謝らないで。昔のことも一切話さないで」
田所「…わかった」
景子「…どうにか生きてたのね」
田所「あぁ、どうにか」
景子「夢じゃないんでしょう?」
田所「あぁ」

景子、田所に触れる。

景子「一緒にあたたかいものでもの飲みましょう」
田所「あぁ」

二人は居間の方へ歩いていく。
暗転。

6

車の中。
田所が歌を口ずさみながら運転している。
助手席の景子、目を覚ます。

景子「あぁ」
田所「あ、すみません、うるさかったですか？」
景子「ううん。ごめんなさい、寝てた」
田所「気にしないでください。もうすこしで最初に出会った公園のあたりです」
景子「あぁ。…なんか不思議な夢を見てた」
田所「どんな夢ですか？」
景子「蒸発した夫が帰ってくる夢」
田所「あぁ」
景子「あの人は今頃、どうしてるんだろう」
田所「…」
景子「あれ、ちょっと待って」
田所「はい、どうしました？」
景子「ここら辺、見覚えがある」
田所「ここら辺ですか？　おうち」
景子「あ、さっきの交差点。私のうち、あそこを右に曲がったところ」
田所「わー、よかったです。戻りますね」
景子「今日は本当にありがとう」
田所「いえいえ。行ってよかったですか？」
景子「もちろん」
田所「なんか、寂しい思いをさせてしまったかなって」
景子「いえ、私が言ったことなんだから。取り壊される前に帰れてよかった。なんか、忘れ物を取りにいった感じ」
田所「あ、そうだ、それ忘れないでください」
景子「え、なに」
田所「やかん」

景子、後部座席を見るとやかんが置いてある。

景子「なんで」
田所「え、忘れちゃいました？　前のおうちの台所にぽつんとやかんだけ置いてあって、ちょうどやかんがなくて困ってたから、って」
景子「あー、そうそう。え、そんなことあったの」
田所「はい」
景子「明美になんて言おうかしら」
田所「正直に言ったら怒られますか？」
景子「そりゃあ、年下の男の方といなべまでデートしたなんて言ったらね」
田所「じゃあ、適当なことを言った方がいいかもしれません

ね」
景子「そうね。なんか、このやかんがあれば、もう少し頑張れそう」
田所「それはよかったです。実は、僕、家族とちょっとトラブルがあって、家出してるんです」
景子「え、何したの？」
田所「些細な喧嘩で」
景子「奥さん殴ったの？」
田所「いやいやそんなことはしてないです」
景子「家族って、奥さん、子供さん？」
田所「そうですね。小学生の息子がいます」
景子「あ、そう」
田所「でも、今日、戻ることにしました」
景子「あ、そう。そうしなさい」
田所「景子さん、ありがとうございます」
景子「いえいえ。こちらこそ、ありがとう」
田所「ここら辺ですか？」
景子「あ、そうそう。そこの自動販売機で止めて」
田所「はい」

車、止まる。

景子「じゃあ、安全運転でね」
田所「はい」

田所、やかんを紙袋に入れて、景子に渡す。

景子「ありがとう。あ、奥さんに色々言われても、言い訳は言わないで、じっと黙っていること」
田所「わかりました」
景子「じゃあね」

景子、田所をじっと見ている。

田所「なんですか」
景子「やっぱり、あなたどこかで会ったことがある」
田所「いや、気のせいです。次に会ったときにそのセリフをください」
景子「そのときはわたし、本当に忘れていたりして」
田所「大丈夫です。僕が覚えてますから。じゃ」
景子「さようなら」

景子、車を降りる。

7

明美の家の居間。
ソファーで横になっている明美。

景子「ただいま」
明美「おかえり」
景子「あら、早かったのね」
明美「早めに帰らせてもらった。どこに行ってたの？　電話しても繋がらないし」
景子「秘密」
明美「秘密？」
景子「いいじゃない、秘密の一つか二つくらいあったって、私はあなたのものじゃないんだから」

間。
明美、笑い出す。

明美「私の真似？」
景子「そう、中学生の頃の明美」
明美「もうー。（紙袋さして）それなに？」
景子「これ、やかん」
明美「え、買ってきたの？」
景子「取りに戻ってきた」
明美「どこに？」

景子、紙袋からやかんを取り出す。

景子「昔のうちに戻って」
明美「ええ、本当に？」
景子「ほら、見てごらんなさい。うちのやかんでしょう」

景子、明美にやかんと紙袋を渡す。

明美「あぁ、確かに、こんなのだった」
景子「お母さんはね、歳をとって、タイムスリップができるようになったの。すごいでしょ」
明美「何言ってるの」
景子「ぼけるのも悪いことばかりじゃないのよ」
明美「はいはい。あ、ご飯食べる？　お風呂入る？」
景子「先にお風呂にする」

明美、台所の方へ去ろうとする。

景子「明美」
明美「何」
景子「私ね、こうやって、あなたとまた一緒に住めて、すごく嬉しい」

明美「えー、本当に」
景子「本当に」
明美「どうしたの？」
景子「まぁ、明日になったら真逆のこと言うかもしれないけどね」
明美「三重に帰りたい、ここは私の家じゃない、って」
景子「そう。でも、それは本心じゃない。本心は嬉しいの。私があなたの成長を間近で見てきたように、今度は、あなたに私の老いを間近で見てほしい」
明美「…うん」
景子「でも、無理はしないでいいのよ。いつか老人ホームに預けてもいい。ただ、今こうやって一緒にいれることが嬉しいの」
明美「私も嬉しいよ。お母さん、ごめんね」
景子「え、なに」
明美「今日の朝は強く言って、」
景子「いいわよ、あれくらい。お風呂入ってくる」
明美「はーい」

景子、田所が口ずさんでいた歌を歌いながら、風呂場の方へ。

明美「それ、お父さんがよく歌っていた歌」
景子「覚えてるの？」
明美「なんか、その歌だけ覚えてる」

景子、去る。
明美、やかんが入っていた紙袋の中に黄色いチラシを見つける。

明美「お母さん、演劇のチラシが入ってたよー！」

音楽が流れる。
暗転。

4　看取りの演奏会

特別養護老人ホームの一室。
介護ベッドに落合が横たわっている。
彼の最期は近い。

介護職員の本田と香川が、落合の呼吸を確認している。

本田「どう？」
香川「だんだん呼吸がゆっくりになってきてますね」
本田「やっぱり今夜かもね」
香川「そうですか…」
本田「覚悟しておいた方がいいね」
香川「結局、姪御さんには連絡ついたんですか？」
本田「うん、ついたけど、北海道に住んでて遠いし、姪御さんも今闘病中なんだって」
香川「あぁ」
本田「しかも、子供の頃に会ったきり会ってないんだって」
香川「あぁ。他に親類は？」
本田「その姪御さん一人だけ」
香川「そうですか、寂しいですね」
本田「うん、ね。（落合に）落合さん、ありがとね」
落合「…」
本田「落合さんが作った伝説は後世まで受け継がれるよ」
香川「なんですか、伝説って」
本田「あれ、知らない？　元気だった頃の落合さん」
香川「はい。私が入った時はすでに寝たきりになってました」
本田「2回、ここから抜け出したことあるんだから」
香川「えー、2回もですか」
本田「2回目は、夜のラーメン屋で無銭飲食して通報されたの」
香川「ええ」
本田「あと、この部屋のドアだけ色がついてるでしょ」
香川「はい。オシャレですよね」
本田「落合さんが椅子を投げて壊したの」
香川「え、ええ。そうだったんですか」
本田「暴言もすごくて、落合さんに辞めさせられた職員、けっこういるからね」
香川「そうだったんですか」
本田「人って生きてきたようにしか死ねないんだよね」

そこに介護職員の金沢が入ってくる。金沢は楽器ケースを持っている。

金沢「あ、お疲れ様です」
本田「お疲れ様。あれ、どうしたの？」
金沢「落合さんが今夜かもしれないって聞いたから、ちょっと、個人的にお別れを言いに、」
本田「あぁ」
金沢「しばらくの間、この部屋にいてもいいですか？」
本田「あ、別にいいけど」
金沢「呼吸状態が悪くなったり、何かあったりしたら、ナースコールで呼びますね」
香川「帰らなくていいんですか？」
金沢「はい。明日、休みなので」
香川「あぁ。（落合に）落合さん、良かったですね。金沢さん、そばにいてくれるそうですよ」
落合「…」
本田「じゃあ、無理しないでね」
金沢「はい。夜勤、頑張ってください」
本田「ありがとう」
香川「ありがとうございます」

本田、香川は去る。
金沢、落合のベッドサイドに立つ。

金沢「こんばんは、落合さん」
落合「…」
金沢「今日は満月です。雲がないから、綺麗に見えますよ」

金沢、楽器ケースを開け、二胡を取り出す。

金沢「落合さんがずっと聴きたいって言っていた、二胡を持ってきました。いつかいつかって言って、先延ばしにして、本当に最期になってしまいました。すみません」
落合「…」
金沢「弾いてもいいですか？」
落合「…」

金沢、二胡を弾き始める。
落合は演奏する金沢をじっと見ている。

すると、自転車に乗った紙芝居屋の岡がやってくる。
金沢、演奏中に岡に気づき、手を止める。

金沢「え」
岡「まだ死んでない？」
金沢「え、はい？」
岡「あー、良かった。間に合った」

岡、自転車ごと部屋に入ってくる。

金沢「いやいや、ちょっと」
岡「はい？」
金沢「あの、施設内では、ちょっと、自転車は、」
岡「あぁ、すみません、でも、これがないと仕事できないから」
金沢「え」
岡「いや、わかるでしょ、私が何者か」

と、自分の服装と、自転車の後ろの紙芝居をアピールする。

金沢「…紙芝居の方ですか？」
岡「そうです」
金沢「え、なんでですか？」
岡「いや、別に私も、ここでこのタイミングで『黄金バッド』をやろうっていうわけじゃないから」
金沢「あぁ」
岡「このじいさんの人生の紙芝居をやりにきたんです」
金沢「え、落合さんのですか？」
岡「そう。あなた、ここの職員さん？」
金沢「はい、そうです」
岡「このじいさんがどんな人生歩んだか知ってる？」
金沢「えーと、ホテルマンをされていたんですよね」
岡「他は？」
金沢「いや、ちょっと、詳しくは」
岡「ね、だから、あんたみたいな人のためにやるの」
金沢「ボランティアの方ですか？」
岡「そう、ボランティアの魂」
金沢「はあ」
岡「他には人いないの？」
金沢「あ、職員ですか」
岡「職員でも誰もいいよ、このじいさんの人生に興味を持ってる人」
金沢「…入居者さんもそろそろお休みの時間ですし、職員も残っているのは夜勤の人だけなので、」
岡「（落合に）寂しいな、あんたの最期は」

落合、舌打ちをする。

金沢「？」
岡「それでは始めます！」

岡、拍子木を打ち鳴らす。

岡「『落合久志の鳴かず飛ばずの一生』、始まり始まりー」
金沢「…」

と、一応、拍手する。

岡「落合久志は、三重県の農家の次男として生まれました。
生まれた時から強欲な子供でした。
食料難で、飢えに苦しむ人々が町中にあふれている時代です。
にも関わらず、『三輪車がほしい』『おもちゃがほしい』と駄々をこねて、お母さんを困らせました。
誕生日に三輪車を買ってもらいました。
嬉しくて、庭や畑で乗り回していたら、なんと肥溜めに落ちてしまいます」

岡、紙芝居をめくる。

岡『『くさいよー、くさいよー』。三輪車で肥溜めに突っ込んだ子供、と新聞記事にも取り上げられ、村では有名な子供になりました。」

岡、紙芝居をめくる。

岡「一方、その頃、私、岡昌史はお隣の滋賀県で幼少期を過ごしていました。
『三輪車をほしい』などと贅沢を言ったことはありません。
両親の働きぶりを見ていたら、そんなことは口が裂けても言えません。
なので、山に行って、草笛を作ったり、花の冠を作ったりして遊んでいました。すると、自然と周りに子供達が集まってきます。落合久志は大違いです。
ここで、あえて私のエピソードを語ったのは、幼少期の出来事がその後の人生をいかに左右するかということを伝えたかったからです
」

岡、紙芝居をめくる。

岡「さて、小学生になった落合久志。特段面白いことは起きません。
中学生になった落合久志。特段面白いことは起きません。
高校生になった落合久志。特段面白いことは起きません。
こうやって、いつも授業中は黒板ではなく、窓の外を見て過ごしました。いつも考えていることはすけべなことばかり」

岡、紙芝居をめくる。

岡「高校3年生の春になって、少しだけドラマチックなことが起きます。
すけべことばかり考えているだけではだめだ、行動に移さなければ！　とようやく気付いたのです。
自分は何ができるだろうと考えた時、小学校の頃にハーモニカで先生に褒められたことを思い出しました。
『よし、バンドをして、女の子にモテて、すけべなことをしよう！』
しかし、人生とは皮肉なものです。そう決意したとき、落合久志は病を患ってしまうのです。その後の長い長い人生をその病とともに歩むことになります。その病とは、インキンタムシ！」

紙芝居の途中で、落合が声を上げる。

落合「おい！」
金沢「うわあ」
落合「俺の一生はそんなんじゃない！」
金沢「喋った？！」
岡「なんだよ、ルール違反だぞ。死にそうなくせして」
落合「死ぬ直前の大切な時間をめちゃくちゃにされて、おちおち死んでられるか！」
岡「いやいや、俺はあんたのためを思って、紙芝居をやってるんだからさ。これは全部事実のはずだよ」

落合、布団を取っ払い、ベッドから降りる。

金沢「え、え、落合さん、大丈夫ですか？」
落合「あ、大丈夫です」

と、そのまま、岡の元へ歩み寄り、紙芝居を勝手に引き抜いて、先の展開を見ようとする。

岡「おいおい」
落合「こんなのはデタラメだ！」

落合、紙芝居を地面にばら撒く。

岡「おいおい、これ、全部手作りなんだぞ」
落合「あんたがここに来た時点でやな予感がしたんだよ」
岡「なんだよ、ひどいな。あーもう、」

と、ばら撒かれた紙芝居を拾う。

金沢「え、お二人はお知り合いなんですか？」
岡「この人とは芝居仲間なんですよ」

金沢「芝居仲間？」
岡「お互い定年退職してから、あるサークルで一緒に芝居をやってたんです」
金沢「あぁ」
落合「（金沢に）こいつとは前から合わないんですよ。（岡に）俺は覚えてるからな」
岡「え、何を？」
落合「最後の舞台の時に、俺の見せ場があったのに、あんたがセリフの順番を間違えたせいで、俺の見せ場が丸ごとなくなっただろ」
岡「いや、それは違う。俺はフォローしてやったんだろ、あんたが大事なセリフを忘れていたからさ」
落合「いや、セリフを忘れてない、ためてたんだよ。セリフをためてたんだよ」
岡「とんだ言いがかりだよ、まったく」
落合「言いがかりじゃない！」
金沢「ちょ、ちょっと」

と、そこに田所、青木、坂田が入ってくる。

田所「なんだよ、落合さん、元気にしてるじゃん」
青木「心配して損したー」
落合「こいつに人生を台無しにされたら、おちおち死んでられないよ」
坂田「まぁ、終わりよければ全て良し、って言うもんね」
金沢「え、あの、みなさんは？」
岡「みんな、芝居仲間」
金沢「え、あぁ」
田所「もう15年前になるかな、みんなで山の中で演劇を作っていたんです」
金沢「あぁ。落合さんにこんなにお知り合いがいるとは知りませんでした」
落合「そうですよね。ここに入ってから、3年間、誰一人面会に来てないですからね」
金沢「…まぁ」
坂田「落合さん、家族がいないからね。（金沢に）この人は自分の好きなことに人生を捧げた人なんですよ、芝居とか音楽とか美術とか」
岡「ギャンブルとか女とか」
落合「余計なことは言うな」
青木「でも、まさか、落合さんがこんなに長生きするとは思ってなかったよね」
坂田「何歳になったの？」
落合「…知らない」
金沢「98歳です」
落合「え、俺、98歳なの？」

金沢「はい」
青木「(今の状態が)えー、若い」
田所「98歳には見えませんよ」
坂田「多分、復活したと同時に、少し若返ってるんだろうね」
青木「それにしても、落合さん、よく生きたね」
岡「こういうへそ曲がりが長生きするんだよ」
田所「いやー、羨ましいっすよ」
金沢「え、え、(この人たちは死んでるの?)」
落合「金沢さん、驚かせてすみません。私がベッドの上で死にかけているのが本当で、今、私が少し若返ってピンピンしてるのは、間違いです」
金沢「…はあ」
落合「自分でもまさかこんなことになるとは思ってもいませんでした。せっかくなので、ちょっと喋らせてください」
金沢「…はい」
落合「ちょっと、これ、邪魔だな」

と、鼻から伸びているチューブを引き抜く。

金沢「え」
落合「金沢さん、さっきの二胡の演奏、素晴らしかったです」
金沢「あ、ありがとうございます」
落合「正直に言うと、私はここに入ることになった時、人生を諦めました。こんなところに入ったら人生おしまいだ、もうあとはどうにでもなれ。
俺は一人で好きなように生きていく、これが信条でしたから。だからここの職員さんには多大な迷惑をかけたと思います。反省はしていませんが」
田所「(小声で)反省しろよ」
落合「でも、金沢さん、あなただけは違った。他の職員は私のことを邪険に扱ったけど、あなただけは人として接してくれた。
あなたの食事介助、素晴らしかった。スプーンにのせるご飯の量、多すぎず少なすぎず、ちょうどよかった。私がごっくんと飲み込むと、『はい、落合さん、いきますよ』という、あなたの囁き声、たまらなかったな。あなたと呼吸を合わせて、ご飯を食べるという行為は、私にとって絶頂の瞬間でした」
田所「なんか無駄に官能的ですね」
落合「そして、さっきの演奏、素晴らしかった。今にも死にそうな偏屈老人のために、演奏してくれた、それも涙を流しながら。
私はこのまま死にたくない、と思った。あなたに、私の人生を知ってほしい、私の思いを知ってほしい、と思った。こんなのは初めてです」
岡「それで、私が駆けつけました」

落合「なんでよりによってこいつが来るんだよ」
坂田「いや、落合さんと一番仲良かったから」
青木「喧嘩するほど仲がいいって言うじゃない」
岡「俺もあんたのために頑張ったんだから、それは認めてくれよ」
田所「力作ですよね」
岡「あ、俺はあんたの人生を勉強したからわかるよ」
落合「何を？」
岡「あんたがこの人を気に入った理由」
落合「ええ」

岡、紙芝居の一枚を取り出し、絵のある部分を指差す。学園祭で演奏をしているグループの絵だ。

岡「この人に似てるんだろ」
落合「あ、いや、」
岡「ほら、図星だ」
青木「あー、学園祭で一緒に演奏をした女の子？　その女の子のこと、落合さんの台本にも書いてあったよね」
坂田「あぁ、あの切ない話ね」
青木「そうそう」

と、カバンから落合の台本を取り出す。

金沢「え、それは？」
青木「演劇の台本。落合さんの人生が書かれています」
金沢「へえ」
坂田「私たちの演劇サークルは、メンバーの人生を元に芝居を作ってたから、一人一人の台本があるの」
金沢「へえー、読んでみたい」
落合「（岡に）これを読んでから紙芝居を作れよ」
岡「一応、ざっと目を通したよ」
落合「ざっとじゃないよ、ちゃんと熟読するんだよ」
坂田「私、あの女の子のエピソード、印象的だったな」
田所「あぁ、学園祭で演奏した後、女の子と一緒に帰るんですよね」
坂田「そうそう」
田所「そしたら、それやっちゃいますか？」
落合「ええ」
田所「紙芝居じゃなくて、もうこれ（台本）やっちゃいましょうよ。どうですか、久しぶりに演劇」
青木「あぁ、いいねえ」
坂田「落合さん、ハーモニカある？」
落合「あるけど、でも、やだよ」
坂田「なんで」
落合「だって死にそうなんだから」

坂田「せっかく復活してるんだからさ」
青木「あの、金沢さんも参加しませんか？」
金沢「え、私ですか。え、何を、」
青木「これからこの台本のある箇所をやろうと思うんですけど、ぜひ役者として」
金沢「え、私が演じるんですか？」
青木「まぁ、演じるっていっても、そのままの金沢さんでいいよね？」
坂田「そうだね」
金沢「え、それで大丈夫なんですか？」
坂田「なんとかなるよ。私がサポートに入るから」
金沢「あぁ」
田所「落合さんの最後の介護だと思って」
金沢「ええ。…わかりました」
坂田「おお」
田所「ありがとうございます！」
青木「よかったね、落合さん！」
田所「演奏シーンもあるので、ぜひ二胡で参加してください」
金沢「演奏もあるんですか。できるかな…」
落合「そしたら金沢さん、無理なお願いで申し訳ないけど、ちょっとだけお付き合いください」
金沢「はい」
坂田「そしたら、落合さん、始めようか」
落合「あぁ、緊張するな」

それぞれ準備を始める。楽器ケースから楽器を出したり、台本を開いてセリフを確認したり。

青木「そしたら準備ＯＫ？」
落合「（頷く）」
青木「よーい、スタート」
落合「（台本を読む）高校３年の冬、地元の公民館で私たちは仲の良いグループで演奏することになった。高校生活最後の演奏になるから、代わり映えのしないメンバーで演奏するのではなく、新しいメンバーを誘おうという話になった。私は同じクラスのある女性に声をかけた」

落合と金沢、役を演じる。

落合「あのさ、金沢さん、二胡弾けるの？」
金沢「あぁ、うん」
落合「今度さ、公民館でみんなで演奏しようと思ってるんだけど、一緒にやらない」
金沢「え、どんな曲やるの？」
落合「まだ考え中なんだけど。ハーモニカと二胡って合うかな」

金沢「さあ、どうだろう」
落合「最後だから、みんなで変わったのやろうって話になってて」
金沢「あぁ、私でいいなら」
落合「本当に？　ありがとう。（語り）こうして、私たちはハーモニカ、二胡、ギター、ジャンベという変わった編成でバンドを組むことになった」
青木「ワン、ツー、ワンツースリーフォー」

演奏始まる。

演奏が終わると、田所、岡、青木、坂田は後ろの方へ。

落合「演奏が終わったあと、私と彼女はたまたま帰り道が一緒になった。二人で駅まで歩いた。駅に着いたら、彼女は電車に乗って帰る、私は歩いて駅の向こうの家へ。卒業間近で学校に行くことも少なくなっていて、彼女とゆっくり話すのはおそらくこれが最後だ」

落合、金沢、向かい合う。

金沢「じゃあね」
落合「うん」

間。

金沢「どうしたの？」
落合「いや」
金沢「…帰らないの？」
落合「あ、帰るよ」

間。

金沢「え、帰らないじゃん」
落合「あ、あぁ…」
金沢「変なの」

間。

落合「じゃあ、まぁ、いっか」
金沢「え、なにが、まぁ、いっか、なの？」
落合「いや…」

長い間。

落合「何でもないよ」
金沢「あ、そう」
落合「うん」
金沢「そっか」
落合「じゃ」
金沢「じゃ」

落合、金沢に背中を向ける。

落合「彼女とはそれから二度と会っていない。もし、タイムスリップがができるのなら、私は、あの長い長い沈黙に戻りたい。そしたら、私の人生はだいぶ変わっていたのではないかと思う」

落合、金沢を向く。

落合「俺、金沢さんとまた会いたいな」
金沢「…え。私も」
落合「え、本当？」
金沢「うん。落合さん、小学校の頃の美術の先生に似てて。前から気になってた」
落合「あ、そう」
金沢「みんな偏屈だって言ってたけど、私は、とても優しい人だと思ってたよ」
落合「ありがとう。僕も、金沢さんとずっと話したい話したいって思ってた」

周りのメンバーがギターやハーモニカを演奏する。
そして拍手。

坂田「金沢さん、ありがとう！　よかったよー」
田所「素晴らしい！」
金沢「ありがとうございます」

落合、金沢と握手する。

金沢「…うまく演じれたかどうかはわからないですけど、わたしの今の気持ちを役に託しました」
落合「ありがとう。夢のようでした」

落合、ふらっとする。
金沢、落合の身体を支える。

金沢「大丈夫ですか？」
落合「うん、ちょっと、さすがに頑張りすぎたかな。眠くなってきた」

金沢「横になりましょうか」
落合「そうだね」

落合、金沢に介助をしてもらい、ベッドの上で横になる。

落合「まさか、老人ホームでこんな素敵な出会いがあるとは思わなかったなぁ」
金沢「私もです。落合さんの人生を知れて、…関われてよかったです」
落合「ふー。みんなもありがとな。持つべきものは友だな」
坂田「またすぐに会えるよ」
落合「岡」
岡「うん」
落合「あっちでも言いがかりつけてやるからな」
岡「おう、待ってるよ」
落合「…あぁ。眠くななってきた」

落合、目を閉じる。
それを見守っている金沢、田所、坂田、青木、岡。
暗転。

明かりがつく。

金沢が目を覚ます。椅子に座ってうとうとしていたようだ。
田所、坂田、青木、岡は消えている。
ベッドの上に黄色いチラシが置いてある。
金沢、ベッドに横たわっている落合の顔を覗く。

金沢「落合さん」

落合は息を引き取っている。

金沢「落合さん、お疲れさまです。あっちでみなさんとお芝居楽しんでくださいね」

音楽が流れる。
暗転。

5　カーテンコール

生活シアターのアトリエ。
生者たちが黄色いチラシを持って集まってくる。
小池と景子は久しぶりの再会を喜ぶ。

夏木、小池の車椅子を止めると、アトリエの奥の方へ。

開演時間になっても芝居が始まらない様子。
人々は口々に「はじまりませんね」「どうしたんだろう」など。

そこに段ボール箱を抱えた夏木がやってくる。

夏木「…誰もいらっしゃらないです。これだけありました」
小池「やっぱりな。彼らはもういないからな」
夏木「え、もういない？」
景子「あの人たちは、私たちを再び舞台に立たせるために、蘇ってくれたのね」
小池「そう、そういうこと」
景子「（舞台に向かって）みんな、ありがとうー！　私、生きている限り、舞台に立ち続けるからね！」
小池「（周りの人々に）皆さん、彼らの台本を読みませんか。実は、一番役を求めていたのは彼らかもしれないな」
景子「そうね、あの人たちはここで演じていた、ここで生きていた。今度は、あの人たちの演劇を上演しましょう」
小池「夏木さん、台本を出してくれませんか？」
夏木「はい」

夏木、段ボールから台本を取り出す。

夏木「山寺の人生」

下手花道に山寺が現れる。

夏木「田所の人生」

上手花道に田所が現れる。

夏木「横井の人生」

下手花道に横井が現れる。

夏木「坂田の人生」

上手花道に坂田が現れる。

夏木「青木の人生」

下手花道に青木が現れる。

夏木「岡の人生」

上手花道に岡が現れる。

夏木「落合の人生」

下手花道に落合が現れる。
夏木、段ボール箱の奥に一枚の紙を見つけ、読み上げる。

夏木「やがて、老いて、ぼけて、死にゆく私たちに、この舞台を捧げます。あたらしい生活シアター」

音楽が盛り上がる。
死者たちと生者たちが混じり合い、カーテンコールを行う。